

講義年月日	2003年9月4日(木)
講演者	加藤 好郎氏 (慶應義塾大学三田メディアセンター事務長)
テーマ	図書館経営からみたリスクマネジメント(危機管理)
講義内容	<p><b>1.はじめに</b>  今、図書館界は、図書の盗難、火災、水害等の伝統的な危険の深刻化と同時に、いわゆる問題利用者 (problem patron) の問題に直面している。問題利用者は、現在のところ、公共図書館に多く発生しているが、大学図書館においても、学生、教員の中に、その予備軍が存在している。地域開放を目指す大学図書館にとっては、利用者層の拡大とともに、いずれ起こり得る問題として、今のうちに対策を講じておく必要がある。これらの危険から、所蔵資料を守り、利用者と図書館員の安全を確保するためのガイドラインを作成するとともに、図書館経営論の中で、危機管理 (risk management) を理論的に展開することが求められる。</p> <p><b>2.米国におけるリスク回避の歴史</b>  (1)1950～1960年代 :スプリンクラー導入、BDS導入。  (2)1960～1970年代  ・ALA 図書館とその資源の防護 (Protection of Libraries) (1963)。  図書館用保険契約 (大学紛争による公共財産の破壊行為)。  (3)1970～1980年代 :library security (図書館セキュリティー) という主題出現。  ・ALA図書館経営管理協会、図書館保険委員会  「蔵書保全と人的安全」に関する年次大会。  全国盗難資料リストデータベース  (Bookline Alert : Missing Books and Manuscripts, BAMBAM)。  ・ALA 図書館災害準備ハンドブック (1986)。  (4)1985年以降 :リスクマネジメントの図書館界への導入。  Bruce Shuman "Library Security and Safety Handbook" (ALA, 1999)。</p> <p><b>3.日本の現状</b>  1980年代までは、資料紛失問題が主体 (開架か閉架か)。1990年代から、阪神淡路大震災等により防災意識が高まる。また、問題利用者が取り上げられるようになる。1996年には、司書課程カリキュラム「図書館経営論」に危機管理が扱われるようになるが、実際の講義や、教科書類への記載はこれからである。</p> <p><b>4.問題処理の枠組みからみたリスクマネジメント(危機管理)</b>  (1)管理運営担当  庶務関連 (不祥事の発覚、緊急事態、訴訟、法的侵害)、人事関連 (セクハラ、労災の賠償責任、人事情報流出など)、会計関連 (売り込み、損失補填、贈収賄など)、施設関連 (不法侵入、火災、地震)。  (2)システム担当  ハッカー、コンピュータウイルス、各種システム障害。  (3)テクニカル・サービス担当  収書担当 (受入前の資料紛失など)、選書担当 (選書内容へのクレーム)、目録担当 (滞貨図書の増加、書誌データの齟齬、書誌データ改ざん)。  (4)パブリック・サービス担当  レファレンス担当 (有料・無料データベースの過剰利用、参考図書の紛失など)、雑誌担当 (資料紛失、雑誌の切り取り)、閲覧担当 (資料紛失、長期延滞、破壊行為、金品の盗難、利用者からのクレームなど)、貴重書担当 (貴重書の紛失・汚損)。</p> <p><b>5.セキュリティー関連事例集</b>  (1)図書館資料の盗難...英国の公共図書館の調査結果、町田市立中央図書館の例。  (2)問題利用者...暴力行為、長期延滞、女性への軽犯罪行為、図書館員へのストーカー行為など。</p> <p><b>6.さいごに</b>  リスクは現場で発生する。したがって、図書館におけるリスクマネジメントは、現場の意識を持たない研究者より先、むしろ現場にいる図書館員が、実際の経験と予測、国内外の事例を収集することで、理論構築することが求められている。</p>
感想	日々さまざまなリスクにさらされているにもかかわらず、図書館の危機管理について、これまであまり研究されてこなかった、というのが不思議である。身近にとらえることのできるテーマなので、これから勉強してみたい。
配付物	「図書館経営からみたリスクマネジメント(危機管理):サービス現場のセキュリティーを考える」